国病久原会　名誉副会長　故　今村　甲　先生　追悼文

今村　甲　先生（君）を偲んで

国立佐賀病院　名誉院長

馬場　尚道

2022 年 10 月 7 日 早朝、 今村　甲先生の訃報を知りましたので、悲しみを抑えながら今村　甲君を偲んで一文を捧げます。

遠い昔の学生時代を思い起こせば、 私が医学部野球部キャプテンの時にマネージャーになってくれ、私がラフなプレーで 短気になりがちな行動を静めてくれたのが今村　甲君でした。 1969 年 8 月、 私は国立大村病院へ派遣され、 先輩の古賀保範先生と今村　甲君の三人で小児心臓治療チームを立ち上げました。 以後、平成元年まで 19 年間、私が心臓血管外科医として活躍できたのも今村　甲君が多数の小児心臓病患者を紹介してくれたお陰であり、 改めて心より感謝の念を 今村　甲君に伝えたいと思います。

又、私が米国留学中 小児無輸血開心術に関する論文で 1975 年の「塩田賞」を戴いた時、一番目にお祝いの便りをくれたのも今村君でしたし、カナダ国際学会に出席していた今村甲君と家族ぐるみでナイアガラの滝で会えたことも楽しい思い出です。 妻や娘たちは優しい今村先生の大フアンでした。 米国より帰国後、私は国立長崎中央病院心臓血管外科医長になり 小児科医長の今村　甲先生から紹介された沢山の小児心臓病患者を助けるために官舎で日夜寝食を忘れて心臓外科治療の仕事に没頭していた事を昨日のように思い出しています。

今村　甲先生、貴方は私が人生の中で一番輝いている時を一緒に歩いてくれた戦友でした。 心よりお礼を申し上げてお別れの言葉とします。

合掌

今村　甲　先生の訃報に接し

国立病院機構　長崎医療センター名誉院長

矢野右人

先日は新聞で今村甲先生の訃報を知り残念な思いに駆られました。静かにご冥福を祈りました。

最近かって同僚として、同級として、友人としての訃報が相次ぎます。自分もその年代にいることを痛感するようになりました。

今村　甲　先生　の　お人柄を偲ぶ

国病久原会　会長

廣田典祥

故今村　甲先生は、国立大村病院、国立長崎中央病院時代の小児科医長として長い間当センターの小児科医療の発展に寄与されてこられました。その素晴らしい足跡は、当久原会ホームページ：特別記事「この人に聞く」（令和３年６月）今村　甲先生：退官講演に余すとこなく示されております。故人を偲ぶ方はぜひご一読をおすすめいたします。

また、当国病久原会の名誉副会長として、いつも OB 会としての、親睦交流のために度々の助言を戴いてきました。こうした交流を通じて先生の優しい、暖かいお人柄を身近に感じておりました。私は以前より、医師の鑑になる人だと心より尊敬しておりました。

先生は、長崎県医師会報の会員の広場、刀圭句会に欠かすことなく俳句を投稿されていました。いつも自然や人の姿を、ありのままに許容する観察の目がとても暖かいので拝読しておりました。昨年あたりから、寄稿が途絶えていたので、どうされたのだろうかと案じておりました。

大根の葉にぎざぎざの個性あり

畑広し直立の葱凛凛と

（長崎県医師会報　令和３年 12 月　第９１１号）

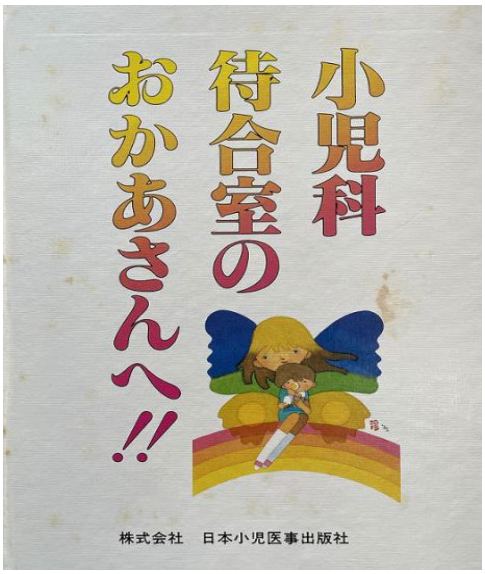
この２句が先生のどうやら最期の作品となっております。
今村先生、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

今村　甲　先生と１冊の本

国立病院機構 長崎医療センター院長

八橋　弘

今村甲先生が 2022 年 10 月 7 日に亡くなられたと廣田先生からお聞きしました。今村先生は、私がこの病院に赴任した頃に小児科医長として勤務されていました。今村先生と直接お話ししたことは数回あったかなかったか程度でしたが、眼光が鋭い中にも優しい眼差しをされた先生と私の記憶に中に残っています。



訃報をお聞きして、家にある１冊の本を読みなおしました。これは、私の子供が当院小児科病棟に頻回に入院していた折に、病気がちな子供の子育てに途方に暮れていたと思われる母親（私の妻）へ今村先生からいただいた本です。本のタイトルは「小児科待合室のおかあさんへ」です。3 人の小児科医による共著本ですが、今村先生のお人柄とその当時の小児科病棟の様子や看護師の思いを知る上で参考になると思い、その原稿の一部を書き写しました。ユーモアを交えながらも、子供たちと看護師に対する愛情に溢れた文章だと思います。

謹んで、今村甲先生のご冥福をお祈り申し上げます。

……

寄り道コーナー　　精神看護の喜び

医療の中で大切な人間の愛

（いまむら）

多摩動物園飼育課長、中川志郎氏の記事「動物の子育て」を読んだ。トリの卵を人工ふ卵器でふ化し、そのヒナを飼育係員がえさを与えて成長させることはできる。

保護と給餌は完ぺきに代行することが可能で、ヒナは親がかりのものと同じように成長する。しかし、こうして育てられたヒナは、成長しても他の同種のトリと群れを作ることができず、生殖年齢に達しても異性と配偶関係に入ることは極めて困難である。仮に番（つがい）になることができ、ヒナをかえしても、これを育てることは殆どできない。

その原因は、自ら親に密着して育てられた幼児体験をもたず、その種類としての生き方の基本を親を手本として学ぶことができなかったからである。この傾向は、サルのような高等哺乳動物でもほぼ同様である云々。

あのなにげなく母の胸で乳房を吸っている赤ちゃんも、イナイ、イナイ、バーをされている赤ちゃんも、その愛情の中から限りない何ものかを学んでいるのを知ると、育児の大切さ、深さを感じざるを得ない。近代機械文明の中では、医療の中の人間の愛の大切さが半ば忘れられていないだろうか。

私たちの病院の慢性疾患学童病棟には養護学校が併設されており、病室で授業もうけられる。ここに入院しているこどもたちは恵まれていると思っていたのだが、患児たち自身は必ずしも恵まれていると思ってないようにもみえる。

考えてみると無理もない。両親に甘えることはできない。学校でいやなことがあっても、家なら両親に不満をぶちまけることができるが、合部屋の同僚には何も言うことはできない。我慢し耐えなければならない。

タカちゃんは小学６年生の女児である。生後すぐに先天性表皮水疱症の診断で入院して来た。身体一面を水疱がおおい、それはあちらこちらで潰れて汁がでて来た。今は大分軽くなったが、まだ身体半分は水疱ができて時々不快を訴える。そういうことで、生まれてから今まで病院生活が殆どである。

両親は離婚し、家に両方ともいないので、家に帰ることもできない。幸いにも、気が強く生活力（精神面で）旺盛である。めそめそしないところがよい。ところが、同じ部屋のこどもたちに命令したり、おどしたりするので、他のこどもたちは彼女と一緒にいることを嫌った。かといって、病室には限りがあり、彼女を個室に入れるわけにはゆかなかった。

この困った問題を病棟看護婦はどう処理するのか？私は非常に興味をもった。まず、婦長は自分の家に連れて帰った。フトンのシーツは水疱で潰れた汁で汚れるのは覚悟の上で。炊事を共にしたり、掃除をしたり家庭の味を満キツさせてみた。看護婦は強くスキンシップを試みた。患児は自分の皮ふ

はきたないので、誰も握手をしてくれないものと思っていたのだから、抱きしめられて喜んだ。話は変わるが、興味あることは、小学校低学年生が看護婦詰所でさわぐ時に叱っても出てゆくことはしないが、一度抱きしめてやると素直になり言いつけをまもる。こどもは抱きしめられることで、心も身体も安定し素直になるものである。

水疱症のタカちゃんも、今は大分素直に変身して来た。「先生、私にはどうして爪が生えんとね。はやくしてくれんね。（どうして爪が生えないのか、生やして下さい）」と悩みを訴えてきた。「先生の頭は、どうして毛が生えんとね。生やしてくれんね。」と私がきりかえしたら、大成功、彼女は笑って納得してくれた。

百匹の羊を有てる人あらんに、若しその一匹まよはば、九十九匹を山に残しおき、往きて迷へるものを尋ねぬか、もし之を見出さば、迷はぬ九十九匹に勝りて此の一匹を喜ばん（マタイ書 18 章）。

私は看護婦の働く姿をみて、新約聖書の言葉が想い出された。

少ない看護婦スタッフが力を合わせて、こどもたちの幸福を求めて、自分を無くして働く姿は尊く胸をうつものである。精神看護は厳しく、難しい。めだつこともない。他からの評価は少ない。けれども深い喜びを感じさせる何かが横たわっている。

……